

人類への「慈悲」こそ「平和への道」

チンマヤ・R・ガレカーン

本日は、この集いにお招きいただき、まことにありがとうございます。この場の一員であることを光栄に思っております。

池田博士ご本人はここにはおられません。まずは博士にごあいさつ申し上げたいと思います。私たちがここで見るものすべて、そして目には見えないものすべてにも、池田博士を感じとることができます。

私が初めて池田博士にお目にかかる光栄に浴したのは、ラジブ・ガンジー首相に随同行した1985年のことです。池田博士とガンジー首相の会見でしたが、私もその場におりました。

もちろん博士と正式に会見したのはガンジー首相ですが、私はいつも「東京で池田博士にお目にかかった」と言っております。私にとって、またとない最高の機会だったのです。2人の偉大な指導者の会談は今なお忘れられません。私自身は会話に参加しませんでした。池田博士の聡明さ、謙虚さ、そして慈悲心に感動いたしました。

この会合の主催者にひとつだけ不満があります。私が話す順番をロケッシュ・チャンドラ博士の後にしたこと。博士の後に、私はいったい何を話せばよいのでしょうか。私にとってロケッシュ・チャンドラ博

士は、博士というよりも賢者と呼んだほうがふさわしい方なのです。

ここにはチュニジア大使のファルク博士もいらつしやいます。2週間前にチュニジアで革命が起こったことは皆さんご承知のとおりです（※2011年1月14日、前年末からの反政府デモの拡大により、長期独裁政権が崩壊。同国を代表する花の名をとってジャスミン革命と呼ばれる）。民衆による驚くべき革命です。チュニジアの人々とともに喜びたいと思います。

インド人である私たちにとっては、これまでも、そして現在も民主主義が生き生きと機能としているのは幸せなことです。それはこれからも続いていくでしょう。ですから私たちインド人は、チュニジアで起きたような革命も、また現在エジプトで起こっているような革命も、この国で目にすることはないでしょう。それは民主主義の強みであり、「平和のためのニュー・ヒューマニズム」を確立する鍵のひとつでもあるのです。

たしかチャールだったと思いますが、民主主義は最も完ぺきな政治体制ではないかもしれないが、より

良い体制が見つかるまでは最善の体制である、というようなことを言っています。私は、インドが民主主義国であるかぎり、世界中の文化と文明がこの国でも花開くだろうと思っています。

「大量破壊兵器を破壊せよ」

池田博士の私たちへのメッセージは、平和のための「新しいヒューマニズム」に至る、まさに「新しい道」であると思います。池田博士とジョセフ・ロートブラット博士の対話がまとめられた本は、インドのみならず世界中の人々に読んでほしい傑作です（邦題『地球平和への探究』）。まさに珠玉の一冊です。平和の実現に必要なすべての鍵が述べられています。

私が考える平和とは、単に戦争や対立がない状態のことではありません。それは一般的に理解されている平和です。平和について語るとき、普通は二国間あるいは多国間の平和のことであって、一国内の平和のことではないのです。

しかし、インドにはヒンドゥー教の伝統があります。

平和を希求するのならば、またニルヴァーナ（涅槃）に到達したい、つまり魂の救済を得たいのであれば、自分の内面をこそ見詰めなければならないという教えます。

これは池田博士のメッセージとも重なるものです。

私は、世界平和を実現する鍵のひとつは、国民国家が国内だけでなく外にも目を向けることだと思えます。おそらく多くの国、いな、すべての国がそうかもしれないませんが、自国のことを考えています。それで自己中心的になり、自分の国のために他国を搾取し、破壊する手立てを得ようとするのです。

大量破壊兵器は、人類が手にしている最大の悪です。大量破壊兵器は破壊されなければなりません。廃絶しなくてはなりません。池田博士とロートブラット博士が徹底的に語り合っているように、核兵器は人類に対する犯罪です。

インドはかつて、核兵器やその他の大量破壊兵器の廃絶を訴えるキャンペーンの最前線に立っていました。その私たち自身が、しばらく前に核兵器を手にしてし

まいりました。1998年に核実験が行われたとき、この国の人々は通りに繰り出し、お菓子を配り、あの「一大イベント」を祝ったのです。通りに飛び出した人たちのほとんどは、核兵器の本当の意味、あるいは核兵器が必然的にもたらす結果をわかっていません。

不幸にして日本は、核兵器の破壊力を実際に知っている唯一の国です。

1978年に（初の）国連軍縮特別総会が開かれましたが、私は大きな失望を覚えました。あの特別総会では、全世界の軍縮、核兵器の廃絶を訴える壮大な宣言がなされました。むろん、それは喜ばしいことでした。当時は、あの会議においても、それ以外の場でも、軍縮は盛んに議論されていました。そして、人類が「核兵器のない世界」を目指すことを世界中で称える日として、「世界軍縮の日」を設けることが決められました。「8月6日」をその日にしようという強い要望がありました。ところが、まさに世界軍縮の日にふさわしい日でした。ところが、原爆を落とした米国が「世界軍縮の日」の宣言に猛反対したのです。

米国が原爆を投下したことは、いかなる意味でも正当化されるものではありません。米国は、原爆投下によって戦争が終結したのだと言っていますが、日本の無辜の人々に原爆を2度も投下する必要はまったくありませんでした。しかし、まさにこの理由で米国は反対し、「世界軍縮の日」は実現しませんでした。私は深く失望しました。

先ほど申し上げたとおり、インドは核保有国となつてしまいました。かつて軍縮キャンペーンを熱心に主導していたインドが、もはやそのような立場にはなれそうもなく、残念な気持ちでいっぱいです。私たちは、核兵器の廃絶、核兵器のない世界というスローガンに、「口先だけで」賛同しているのです。あのキャンペーン、あの熱情は失われつつあるようです。

池田博士と創価学会は、インドが自らを再発見できるように、さまざまなかたちで力を貸してくださっています。私たちはインドの遺産の一部を見失ってしまいました。しかし創価学会の活動のおかげで、今では私を含め多くのインド人が、自分たちの遺産について学

んでいます。近い将来に開学するナールンダ大学も、インド人の自己実現に大きな役割を果たすことでしよう。

同じように、核軍縮の必要性についても外国人から教えられています。キッシンジャー博士ほか3名の要人が核軍縮のキャンペーンを起こしています（※2010年1月、アメリカのキッシンジャー、シュルツ両元国務長官、ペリー元国防長官、ナン元上院軍事委員会委員長の4人が、核兵器廃絶構想を発表）。

しかし私の目には、彼らの行動はどこか疑わしく見えてなりません。無私の動機とは思えないのです。しかし動機が何であれ、彼らは運動を起こしました。それが核軍縮に対する意識の向上につながるのなら、私たちは歓迎します。

「平和のためのニュー・ヒューマニズム」に必要なことのひとつは、すぐにも大量破壊兵器を廃絶することだと思います。ここで池田会長の存在が重要になるのです。池田会長は最高の人間主義者であり、ロートブラット博士らとともに、人間主義を広めてこられました。

た。ラジブ・ガンジー氏は池田会長の軍縮の訴えを強く支持しました。これは軍縮を実現する重要な一歩だと私は思っています。

人間への奉仕から

「内面の平和」「社会の平和」が

誰かがこんなことを言っています。地球上には万人の必要を満たすものは十分にあるが、万人の貪欲を満たすだけのものは決してないと。貪欲は人間の本性です。

私は池田博士の著書を読み、たくさん段落や文章にマークをつけています。ここでいくつか引用したかったのですが、賢者ロケッシュ・チャンドラ博士の後ですから、私としては何も言うことはありません。しかしこれだけは私にも言わせていただきたいのですが、池田博士が非暴力のメッセージを広める原動力となったのは、ブッダがいう「馬（煩惱）の調御」だと思います。

池田博士の最大のメッセージは慈悲でしょう。涅槃

に到達する道、神に到達する道は、必ずしもヴェーダや法華経などの經典をマスターすることではなく、人類に奉仕することなのです。ギーターにも、「人々に奉仕すれば私に到達できる」と書いてあります。このバクティ（献信）によって、いわゆる普通の人々が救済に至ることができるのです。ですから私は、ブッダの慈悲のメッセージこそが、池田博士が私たちに発している最も重要なメッセージだと思っています。そしておそらくそれは、自己実現に達する最も困難の少ない道なのです。

慈悲の心をもつことは、瞑想に比べれば難しくはいはずです。私は毎朝、瞑想しています。しかし瞑想していると思うだけで、実際にはしていません。ただ座っているだけです。朝の瞑想は35年間続けてきました。もっと高いレベルに達していてもおかしくなはいはずだと妻にも言われるのですが、瞑想を始めたころと同じレベルのままです。

そうはいっても、瞑想にはメリットがあると思います。頭の中にはいろいろな考えが浮かびますが、最も

良い考えが浮かぶのは、座って瞑想しているときなのです。文章を書かねばならないときなど、私にとつて一番難しいのは書き出しの一文です。本を書くなら、

最初の段落が一番難しい。今日ここに来るときも、何を話せばよいか、はつきりわかりませんでした。ところが、瞑想すると、最も良いインスピレーションがやってくるのです。それを神と呼ぶにせよ、あるいは何か別の名で呼ぶにせよ。このように、瞑想には瞑想の価値があります。

しかしながら、自己実現に至る近道は、慈悲心をもつことです。私たち一人ひとりが、すべての他者を思いやること、それが平和に通じる道なのです。このシンポジウムによって、「人類に対する慈悲心こそが、平和に至る道である」という考えが呼び起されることを願います。

これはなにも新しい道ではありません。新しいヒューマニズムといっても、必要なのは人間性であり、すべての他者を思いやり、互いに慈悲心をもつことです。それが、私たち自身の「内面の平和」そして「社会の

平和」に至るための最も容易にして最も確実な道だと私は思うのです。

(Chimaya R Charekhan)

インディラ・ガンジー国立芸術センター会長